



『在日フィリピン人児童のための算数教材 足し算・引き算 日本語クリアー』

本教材は、凡人社から発行された『足し算・引き算 日本語クリアー』（大蔵守久著、2000年）をもとに、日本の公立学校に通うフィリピン人児童のために作成したものです。

オリジナル教材は「コトバがネックとなって算数の内容がはっきりとつかめない」児童むけに、算数を学びながら必要とされる最低限の日本語を学べるようになっていますが、そこでは教材の活用方法については触れられていません。

そこで、今回は指導者の助けとなる「指導ポイント&ヒント」を大蔵先生に作成してもらいました。また日本語の苦手なフィリピン人の保護者やボランティアの方が家庭や地域において使用されることも想定して、ローマ字や母語等を取り入れる工夫もしました。

本教材の特長

1 コトバがネックになっている児童のために

本教材は、「コトバがネック」となって算数の内容がはっきりつかめない児童のために作りました。外国人児童はもちろん、長期にわたり海外在住をしてきた帰国児童その他、「教科内容理解のために《日本語》にもスポットを当てる必要のある児童」の指導に使うべき教材です。フィリピンから来日したばかりの児童や日本語が苦手な保護者を配慮してフィリピン（タガログ）語・英語訳つき用語集やローマ字ルビ付きの教材等を用意しましたが、「コトバがネックとなっている児童」のための配慮については基本的に変わりありません。

2 教科書に入るための「道しるべ」

小学校で使われている教科書は日本語が通じる児童を想定して作られています。ですから、日本語がよく分からない児童や、話せても抽象的な思考を必要とする日本語に慣れていない児童には「敷居が高い」つくりになっています。本書は、そのような児童のための「教科書導入書」もしくは「教科書への橋渡しテキスト」として位置づけて作成しました。ですから、無理にこの段階で評価はしなくてもよいでしょう。評価は教科書の問題に入ったところで行う方が時間的節約になり、時間が限られた教育現場ではより現実的なのはです。

3 足し算・引き算の基礎をしっかりと習得

本教材は、(1位数) + (1位数) の足し算から始まり、(4位数) - (3位数) の引き算までを扱っています。これは、新学習指導要領の小学校3年生の前半までの内容に当たります。ここまでをしっかりと習得しておけば、あとの学年の考え方や計算方法もこの延長線上にあるので大丈夫です。

4 《イラスト》で難しい概念を分かりやすく

その単元で理解させたい概念（算数的思考内容）の習得を第一に考えました。そしてそのために「イラスト」を活用しました。「絵」そのもので概念が理解できるようにしました。

そして、そこから「コトバ」の理解へと結び付けていっています。単に教科書のコトバを易しく書き換えたテキストではありません。むしろ、教科書のコトバをそのまま使うことによって、授業での「コトバ」「日本語」が理解できるようにしてあります。

5 スモールステップと一事習熟

大切な所、間違えやすい所では教科書より細かなステップを踏んで学習を進めさせるようにしました。また、練習問題での数値の選び方にもこのスモールステップの考え方を採用しています。ふつうは例題をやった後の練習問題では例題とは異なる数値で出題されますが、本書では、同じ数値や似たような数値で練習させ一つの問題に習熟させるようにしました。

6 教材の構成と対象


教材は「児童用」、「日本人指導者用」、「フィリピン人指導者用」に分けられます。「児童用」と「指導者用」は日本語のみで表記されています。「フィリピン人指導者用」にはローマ字ルビをつけ、さら英語・フィリピン（タガログ）語で表記されています。それぞれ対象や目的に応じてお使いください。また学習、指導の手助けとするために、重要用語を集めた「用語集〈フィリピン（タガログ）語・英語〉」を用意しました。

児童用

フィリピン人児童が日本語を使って算数を学ぶことを目的とするため、母語の挿入は最小限にしてあります。重要な用語や例文を各課の初めに重要用語を提示した「ようごとぶん」があります。

日本人指導者用

「児童用」に指導の際に活用するための「指導ポイント&ヒント」を加え、日本人指導者が本教材をより活用しやすくしました。

フィリピンでの算数教育は英語で行なわれているため、英語に関する情報やフィリピン人児童がつかまづきやすいと思われる箇所はミニアギラマーク  で示しています。

フィリピン人指導者用

【ローマ字ルビ振りつき】

日本語が苦手なフィリピン人指導者や保護者を対象に、児童に指導する際に教材の文字が読めるように作成しました。

【英語・フィリピン（タガログ）語表記】

教材を英語・フィリピン（タガログ）語で翻訳しました。日本語が苦手なフィリピン人指導者や保護者を対象に、教材内容の把握のために作成しました。

用語集〈フィリピン（タガログ）語・英語〉

教材各課の初めに提示する、「ようごとぶん」を一つにまとめて用語集としました。学習あるいは指導の際に活用してください。

指導される方へ

1 基礎の基礎から

「このレベルからスタートできそうだな」と思っても、もうワンランク下から教え始めるようにしてください。「できなかったから」と言って、後から学年を下げるようなことをすると、その児童のプライドを傷つけ学習意欲を殺ぐこととなります。どこからスタートさせるかを見極めることができるのは、そばにいる指導者だけです。

2 児童と一緒に

「教えよう」という姿勢より「児童と一緒に学ぼう」という姿勢で本書を読み進めた方がよいでしょう。目の前の児童と同じ視線で進めることによって、分かりにくい所がより鮮明になってくるはずです。

3 「何も足さない」「何も引かない」

概念を理解させ、問題を解いていくために「とりあえず必要で十分な」コトバで作成しました。これ以上のコトバを使うと、未知のコトバが増え理解が難しくなるおそれがあります。そのような理由で、他のコトバを使わず、本文で使われているコトバだけで進めるようにしてください。また逆に、これ以上コトバを省かないでください。これ以上省くと、在籍学級の授業で使われるコトバの量とのギャップが大きくなりすぎます。「何も足さない。何も引かない。」どこかのCMのようですが、まず、この精神で対象児童に当たってみてほしいと思います。

4 分からないコトバに出会ったら

本書のコトバがどうしても理解できない時こそ、ふだん児童と接している先生の腕の見せ所。その児童が知っていそうな同義語を探して説明してください。しかし、他のコトバに置き換える時には「一度に何通りものコトバ」に言い換えないう気をつけてください。まず、一つの言い方に置き換え、そのコトバで何度か説明を試みます。一度口にして分からなかったからと言って、次々と他のコトバを持ち出して説明することだけは避けましょう。

5 教科書の練習問題で仕上げを

前ページ「本教材の特長」に書いた通り、本書は「一事習熟」の精神で作ってあるため、「練習問題にバリエーションがない」というデメリットを抱え込まざるをえませんでした。それをカバーするため、ある単元が終わったら、学校の教科書の練習問題を使って「仕上げ」をするようにしてください。

6 指導ポイント&ヒントに目を通してください。

指導者の方は授業前に必ず各課の指導ポイント&ヒントに目を通してください。指導上注意すべき点、指導の方法などが書かれています。

7 習得済みの方法を尊重してください。

フィリピンと日本では計算方法が異なる部分がありますが、重要なのは「正しい答えを導くこと」です。既に計算方法が確立されている児童に対しては、そのやり方を尊重してあげてください。

8 「聞かせる」ことで日本語も覚えさせてください。

指導ポイント&ヒントにある【表現】を指導者ができるだけ反復して児童に聞かせてください。耳にする量が多ければ多いほど、その児童の記憶に残すことができます。

9 具体物を多用して理解の手助けをしてください

数字や言葉だけではなかなか理解できない場合は、図やものなど具体的なものを利用しながら説明してください。

10 児童の実態に合わせた所から利用してください。

本教材は学年別構成にはなっていません。学年にこだわらずに児童の習得段階に応じ、時には下の学年の内容から始めてください。

11 「用語集」は最終的なツール。

冒頭にもありますように、本教材は算数を学ぶと同時に教科内容理解に必要な最低限の日本語を学ぶようになっています。ですから、やさしい日本語、および具体的な図や物による説明をしたのだけれど、それでもその児童が理解できない、という状況になってはじめてフィリピン（タガログ）語・英語訳を参考にしてください。

12 ダウンロード方法

本教材は PDF ファイルをダウンロードして印刷して使うものとなっています。ダウンロードの方法には以下の2通りがあります。

①「一括ダウンロード」

教材全体を一度にダウンロードします。1冊のまとまった本として利用したい方向けです。

②「課毎にダウンロード」

1課につき1ファイル、全部で40ファイルとなっています。学習進路等にあわせて、必要なところだけ取り出したい方向けです。

* 「本教材の特長6」にあるとおり、種類によって内容が異なりますので、必要なものをダウンロードしてください。

* 「～くると」、「～たべると」、「～あげると」、「～つけると」、「～ひくと」、「～かくと」、「～とると」、「1くりさげると」、「十のくらは0だから」、「□から□はひけないから」といった日本語の表記の後は必要に応じて「、」を入れてご利用ください。